

## 帽子

鼠色を基調とした冬帽子の写生である。羅紗地の柔い感じと暖い色調は、この繪の生命である。色彩と明暗の變化を統一的に表現した所に、物質感 は 表明されてくる。數尺離れて靜かに全相を見詰めると、相を表現した立體感が髣髴する。

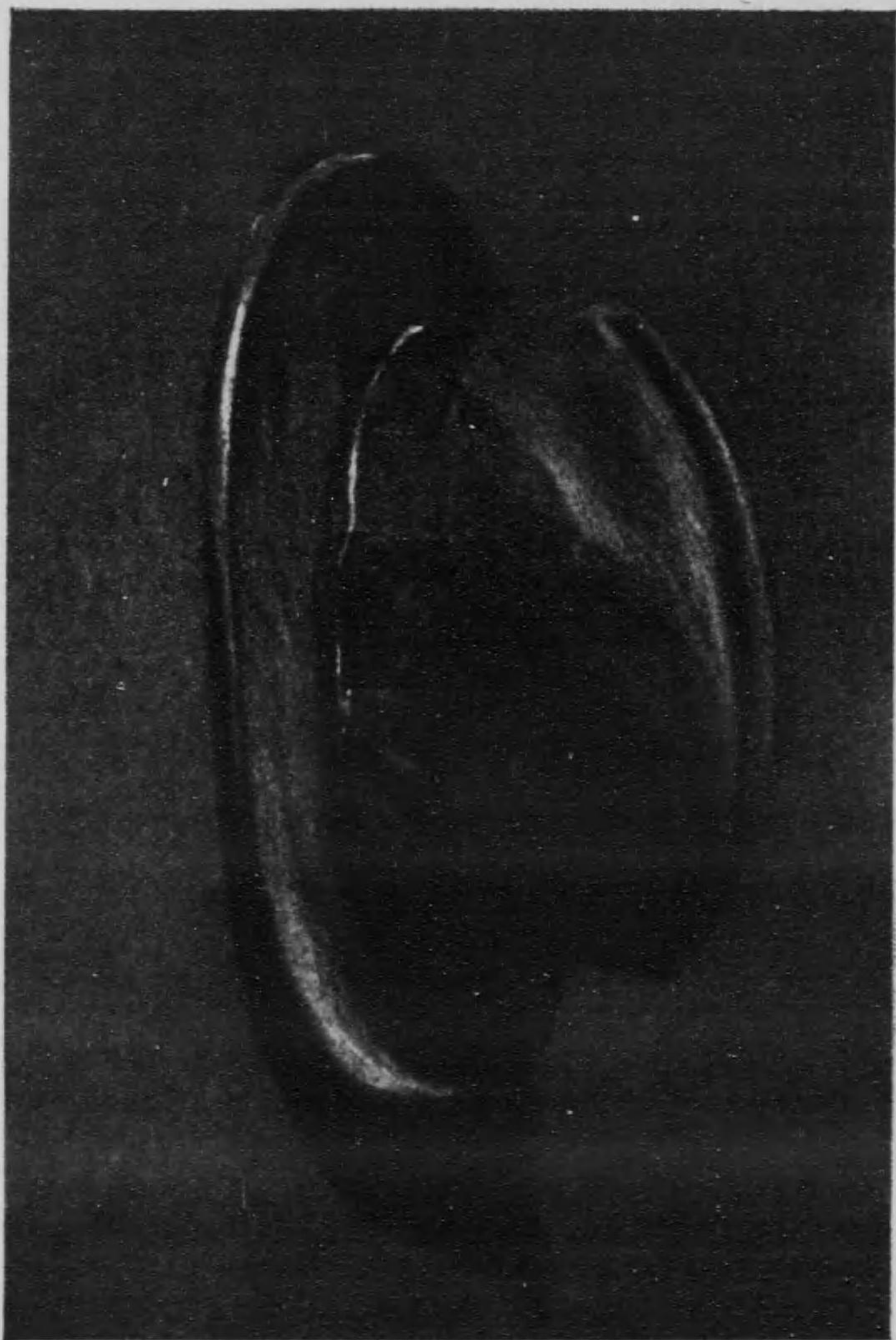
繪としての表現は、例令寫生によるも物象の各部を智的に紙上へ羅列するのみではならない。全相から響く自己の内的閃を、相の表現として感じの閃として、統一的に全相的に表出描寫する所に、繪は繪としての價值と美感がある。

併し表現は眞剣でなくてはならん。眞面目で偽はらざる自己内心の披瀝でなくてはならん。實感から進つた赤裸の創造的熱血でなく

てはらん。徒らに氣儘勝手のなぐり書きは、自己を虚偽に現はした不自由描寫で、墮落描寫の甚しいものである。正しい姿、整つた調子、しつかりとした色價からの實相感が畫面に豊滿してゐなくてはならん。

この繪は左側面から軟い光を浴びた全相を、囚はれざる手法で表現したつもりである。殊に厚ぼつたくて併も手障りのよい柔い色感を中心として、餘程突込んで描いたのである。特に明暗の調子と色彩の階調に注意した。

初め稍々明るい青色で大體の姿を描いた。最初の輪廓はクレヨンでもパステルでも温い感じのする明るい色で描いたがよい。尤も三年以下の兒童には、自分の欲するまゝに直ぐと部分的に強く描かしても差支ないが、稍上學年では輪廓のとり方に一通の訓練をするがよい。従つて最初にはなるべく軽くパステルを持つて、直線的に全體を描か



すがよい。かうすれば物象の全相を大きく比較的誤りなく描出することが出来る。尤もこの輪廓のとり方も従來の新定畫帖のやうに一定の型の内にすべての兒童を無理に當嵌めたくない。よく描寫の精神を酌みとつて、描寫の方法と順序を各自に發見させるがよいと思ふ。

大體の姿が定まれば明暗を大きく見て大體の色彩を配るのである。それから漸次細部の明暗や色彩の變化を味つて描出して行く。この間に、常に全體の統一を亂さないやうに、實物と比較して部分よりも全體の感じに注意しなくてはならない。初學のものゝ描寫は明暗が散在して全體としての統一を失うことが多い。描寫が圓熟するに従つて目がよく利いて、大きな筆使の内にも微細な感じを表現することが出来るやうになる。

貝

貝類には寫生材料として面白いものが多い。形の上から見ても變化のある美的なものが尠くない。色も相當に變化があつて落着いた色調である。殊に明るい輕快な色をしてゐるものが多い。日常注意してゐるとかうした材料も蒐集するに難くない。

この繪は着色用紙に軟製のパステルを用ひて比較的細密に寫生したのである。描寫用紙と同色の紙の上に寫生すべき實物を置いて、左上方から光線をとつたのである。着色紙を用ひてバックを描かない場合には、同色の紙を實物の下敷にすると、實物の感じがよく把める。ことに對比關係によつて色彩の要領がよく判る。

描寫の際は専ら實物から受ける感じを尊重する。寫生で最も大切

のは實物を上手に觀察することである。見ると言つても實在を通して自己の心を見るのである。かうした見ることから描き方が發見されるのであるから、十分にモデルの姿や色價や明暗を看取らなくてはならん。

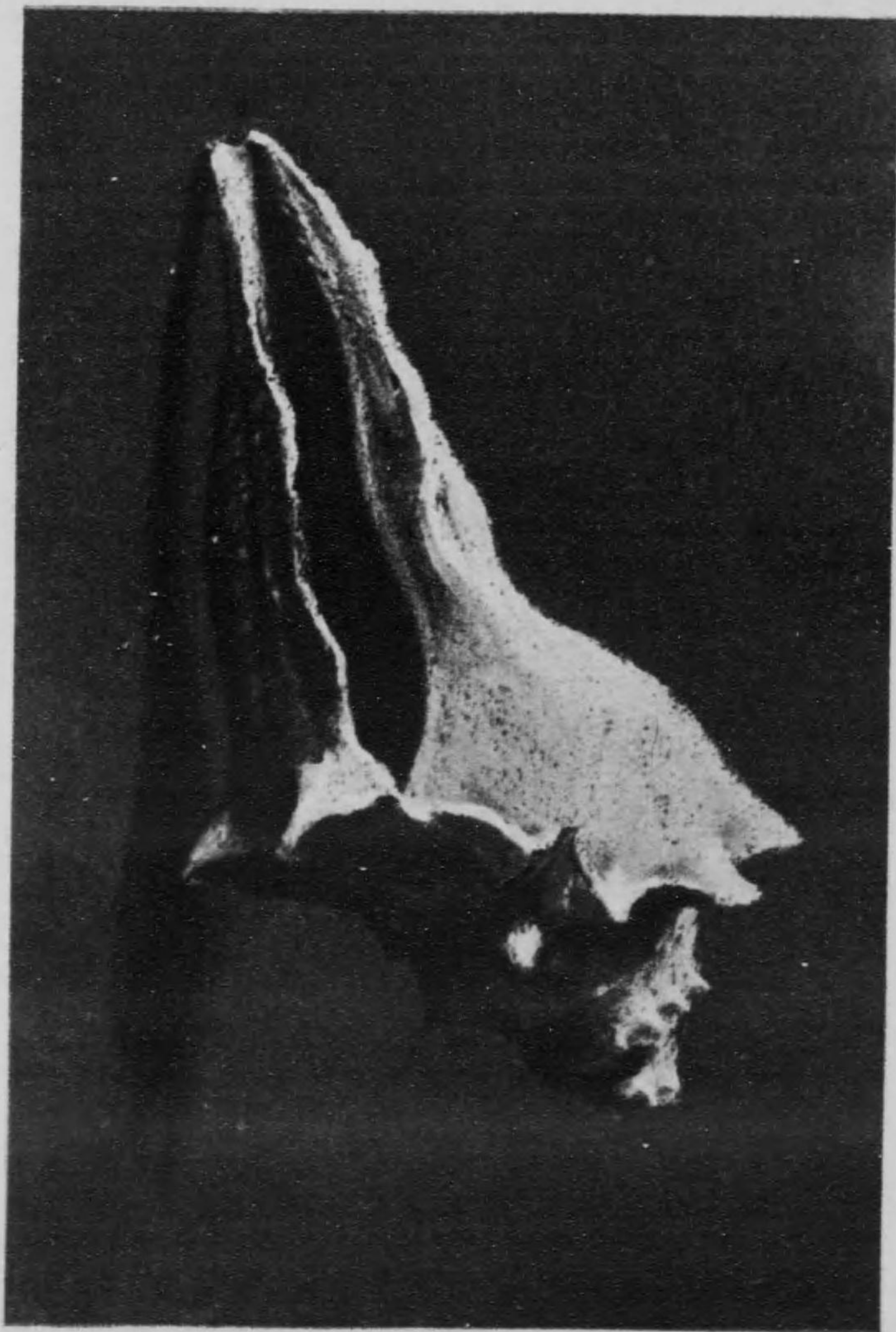
實物の一番格好のよい方面を選んで、三尺位の距離から寫生した。同じ物でも見る方向によつて美的になるから、十分方向の美を求めろがよい。描くに當つては、十分實物の全相を觀察して、全體の姿や明暗の調子を大きく見ることが大切である。

暖かな明るい色(黄・橙・明綠等)で大體の姿をなるべく直線的に描きとつた。次に漸次細部の輪廓を採つて、明部の中間色で陽面(光りの當つた部分)全體を塗り、次に暗部の中間色で陰面(陰になつた部分)を塗つて明暗二色の調子を定めた。

次に明部の最光部を塗り、後、暗部の最も暗い色をつけて四つの調子となし、更に其の中間色を入れて漸次明暗の階段を増して行つた。これと同じに色相にも注意し、明部には白・淡紅・明綠・空色等を配し、暗部には黒・赤・綠・紫・倍赭等を配して行つた。

影部(地面に投げられた影)は青綠・倍赭等で、影の強弱に注意しながら描いた。陰影によつて立體感が現はれ、物の量が描寫されるから十分觀察して描かなくてはならん。

最後に全體の調子を吟味して、最明部や最暗部を描き起し、仕上をして行つた。



### 光つたコップ

この繪は鼠色のバステル紙に八色のアメリカンバステルで描いたので、コップの中に赤色の水を容れ、右方から柔い光をあて、寫生した。硝子製の器物は背景にある器物が透けたり、諸種の方角から反射光線が來て随分複雑なる光りと色を現はすものである。兒童が硝子製の器物を描くと硝子は透明で白いものであるといふ概念で描寫してしまふ。併し少しく眼がさくやうになると實際硝子製の器物は光りを描くに大變面白い器物である。

輪廓はやはりバステルで採つたがよい。併し子供がやるやうに餘り白色で取つては調子を描く上に却つて不得策である。すべてバステル畫ではやゝ暗く描いて後から明色で光りをつけた方が感じを出

すに都合がよいやうである。これも必ずと決つたものでは勿論ないが、實物の明るい色と暗い色との中間色位で輪廓はなるべく正しく描くがよい。この際も餘りパステルに力を入れずに、成るべくはパステルを斜に摘んで腕よりはむしろ上體で描くやうに手首を全く紙面から離して描くがよい。そして軽く使ふ習慣をなるべくつけるがよいクレヨンではなるべく押しつけて濃くはつきりと描くが、パステルはクレヨンに比して軟いから軽く描いても相當濃くつくのである。

輪廓が出来たれば五六尺位離れて全體の姿をよく正し、更に大きな明暗の區別を描いておくが普通の順序であらう。次にやゝ暗い色からなるべくパステルを斜にして巾廣く大きな調子を描いて行く。色彩から見ても大體の色別をして大きく塗り分け漸次色や光りに注意しつゝ感じを目標として描出して行く。勿論最も暗い所などは後か



光つたコップ

ら入れてもよい。要は常に調子を描き出すやうに注意する。パステルでは色が相當雜るけれ共、色そのものは中々實物と同様にはならない。或る程度までにして寧ろ調子を整へることに注意して行けばよい。

ハイライト(最高明部)はなるべく最後に入れて、全體の調子を引きしめるがよい。光つた部分が數ヶ所にある時は色相なり明度なりが異なつてゐて決して同種のものが數ヶ所にあることは殆どないから十分實物を觀察して描出するがよい。



大正十三年六月二十五日印  
大正十三年六月二十日發

行刷

(定價金貳圓)

著作權  
所有

現表由自  
習學新の畫ルテスバ

印 刷 者	發 行 者	著 作 者
高橋郁	東京市京橋區弓町二十五番地	橫井曹一
	東京市京橋區南傳馬町二ノ五	
	目黒甚七	

會社式株刷印協三 所刷印

發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目  
新潟縣長岡市表四ノ町(本店)

目黒書店

東京 電話京橋二一六三番  
長岡 電話長岡一八八番  
振替口座二八〇九番  
振替口座三六一九番



終

